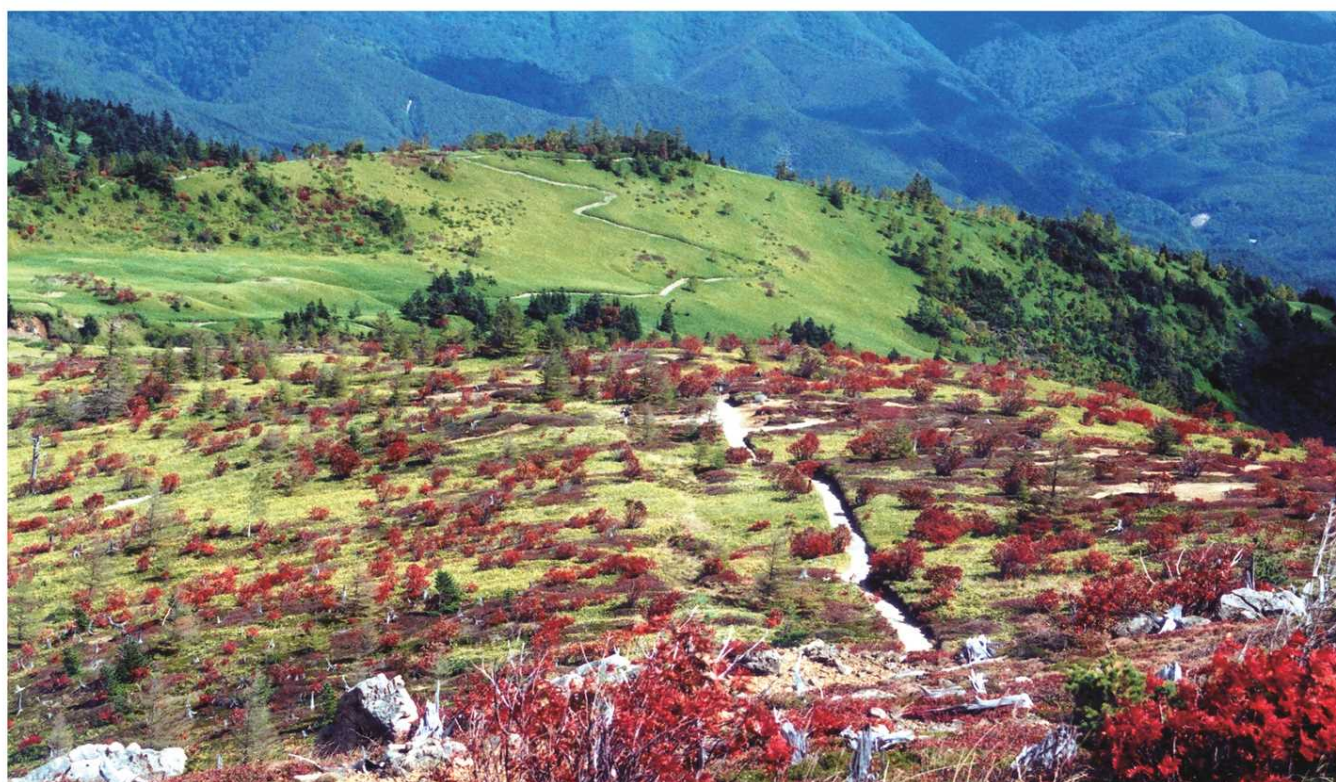


群馬県のどこでも、いつでも ホスピスケアが受けられるように！

ねがひ

群馬ホスピスケア研究会
会報 ねがひ第90号
発行 2016. 10. 15
責任者 土屋徳昭

〒370-0872
高崎市北久保町 10-9
電話 027-353-1341
郵便振替口座
00560-4-5287



撮影地 群馬県草津町芳ヶ平

撮影者 森下悦子

目次

グラフ 緩和ケア病棟ボランティア	2-3
死別・悲嘆に寄り添い120年	緩和ケア病棟で、死別の分かち合いの会で、訪問で 土屋・吉本4
わたくしごとですが...	吉本明美5
夢みたものは (死別体験手記)	荻原雅信 6-7
四季の風韻	眞木興空8
ぴあサポぐんま公開講座から	光る言葉9
インフォメーション・寄付ありがとう10

渋川医療センター 緩和ケア病棟ボランティアだより 2016年6月~9月

6月 懐メロを聴く 尺八演奏 星野 完さん



星野さん、自己流で始めた尺八の技量がかなりレベルが高いと思われます。演奏ジャンルも民謡はもちろん、歌謡曲、ポップス、ジャズ、等々なんでもござれの星野さんです。星野さんがお弟子さんとご一緒に見えたのは今回が初めてでした。

7月 歳を忘れた 女声コーラス ハピネス の 美的ハーモニー



今月お誕生日を迎えたお二人に、歌のプレゼント。「嬉しい・・・!!」ご本人もご家族も大喜びでした。



平均年齢、個人年齢なし、平均年齢????。歌が好きで、好きでたまらない女性の皆さん、西群馬病院の時代から、かれこれ9年、相変わらずの若き歌声と美貌で訪問して下さいました。指導者のLara 隆子さん、ピアノ伴奏の石井陽子さんもボランティアマインド一杯の方です。童謡や唱歌を中心に楽しく歌う歌は、聞く人も楽しい気持ちにさせてくれます。歌に年齢はありません。



8月 夏祭り



上州の夏祭り、というより、今や、一年中行事に登場する「八木節」。そのルーツは、お隣の栃木県足利市堀米町出の堀米源太さん？

絹の産地であった下野、上野(上州)から繭や生糸を運んだシルクロードとともに伝搬し、横浜の港へ。横浜のとある小学校では運動会に全校で踊ってますよ。



8月 梅雨明け 爽やかコンサート 天までとどけ・・・!!!



7月末、音楽の大好きなお仲間が天国に召されました。その方への思いを込めて、急ぎよ演奏会を開いてくださったお友だちのみなさまでした。

「天までとどけ・・・!!!」

ピアノと、フルートの演奏、心にしみました。



9月 小さなコンサート 綺麗なクラシックを楽しむ



青柳、小田原のお二人にも、西群馬病院時代からのお付き合いをいただいています。群馬県の高校音楽教育に長年尽力してこられた青柳先生。群響の演奏家も務められた小田原さん。お二人は本当にボランティア精神に厚い心をお持ちのアーティストでおいでになります。お二人の演奏の時ばかりは、病棟が一流の音楽ホールになる時です。

死別・悲嘆に寄り添い20年

悲しみは慈しみとともに

Mさんの死を悼む

3年近く、毎月のように死別体験者の分ち合いの会に参加して下さっていたMさんが亡くなられた。

5月にいつも通り参加され、その一週間後位に体調を崩され、2か月近くの入院の末、亡くなられたと聞く。急な知らせに驚きもしたし、悲しかった。同時に奥様を亡くされたからの3年間のMさんの孤独、悲しみからの解放に「お疲れ様でした」と、声をかけたい思いもある。

Mさんは、3年間、毎月ずっと、絞り出すような声で「辛いですね…妻がいないと、何も楽しくない。」と、繰り返していた。外出や自分の趣味の再開など、いくつかの変化はあっても、Mさんの毎月の嘆きは変わることがなかった。同じ体験をされた会の仲間が少しずつ死別の悲嘆から立ち直り、新たな生活を踏み出していくのを見聞きしつつも、Mさんの言葉に変化はなかった。

私はそんなMさんの話を聴きながら、時に「前を向いて、これからの自分の生活を味わってほしい。もう少し笑えることがあればいいのに…」と、思ったことも正直あった。

自分の語る寂しさや悲しさに自らの心を潰されてしまわないで…と願った。でも、所詮、それは「私」の思いだ。

Mさん、あれほど会いたくて仕方なかった奥様と、今は一緒でしょうか？「よくぞ、3年間頑張りました」と、奥様は労ってくれたでしょうか？時々しか見られなかった人懐っこいMさんの笑顔でしたが、今は心から微笑んでいらっしゃるでしょうか？Mさんとの3年余のお付き合い有り難うございました。

どうしたってゼロにはなる筈もない死別の悲しみを毎日、それが自分の勤めのように抱えながら過ごされてきたMさん、私達は貴方に今、心から「お疲れ様でした」と伝えます。

毎月の参加はMさんにとって、何か役に立っていたでしょうか？又いつかお会いする時にその返事を頂ければ嬉しいです。

ご遺族の娘さんが、「父は毎月の分ち合いの会に行くことを生きがいにしていました。お世話になりました」と知らせてくださいました。

吉本



「遺影にする写真がないの・・・」

高、中、小の三人の息子を持つお母さん、すっかり細くなった手足ですが、意識は清明で凛としておられました。看護師さんと相談、彼女の遺影を作るためボランティア仲間が相談しました。ヘアとお顔のメイクアップ、ネイルも念入りにしました。美容師をしている仲間の支援をお願いしました。

「袖を通したことのない服があるから」とご主人に言い、家から持ってきてもらいました。家族室をスタジオ代わりに、ドレスアップした姿を撮影しました。花で一杯のお庭も背景にしました。談話室ではドクターはじめ担当看護師、ボランティア、潤んだ視線のご主人と揃って記念写真も撮りました。

出来上がった写真を見ていただくための時間はそう長くはありませんでしたが、手元にお届けできました。

(土屋)

「しずかな卒業」

暗く憔悴した表情で、その方はお母さんとご一緒に見えました。会が始まる前からハンカチで顔を覆うように涙ぐんでいました。ご主人は東北のある都市に単身赴任していました。突然、ご主人の危機を知らせる報が舞い込み、取るものもとりあえず現地に向かいました。病院の奥まった部屋に白いシーツに覆われた姿に直面しました。突然の、あまりに突然の出来事でした。まだ、ご結婚されて間もないということでした。

「嘘だ、信じることなんかできない」慟哭が聞こえるようでした。翌月から彼女はお一人で見えるようになりました。しかし、多くを語ろうとはしませんでした。あまりの現実の惨さから逃避し、閉じこもろうとする姿でした。

「主人はどれほど辛く、苦しかったことでしょう・・・。私は、何もしてやれなかった・・・。私だけが幸せになってはいけないのです・・・。」

断片的に彼女の口から言葉が聞かれるようになりました。しかし、心を塞いだ重い扉はそう簡単に開こうはずありません。

2年が過ぎたころ、彼との思い出を話し始めました。休日には、自慢のUSV車であちこちの野山をめぐったことなど・・・。

彼女は、分ち合いの会が降雪のため中止になった月も、いつもの会場に足を運んでいました。それほど、分ち合いの会が彼女の居場所になっていました。

それから半年、彼女の足音は途絶えました。

「しずかに卒業した」と思いました。(土屋)

わたくしごとですが…

吉本明美

人って

複雑である。他人から指示されたりすると「私なりにやらせて欲しい」と、自分の思いが強くなったりする。それまでは、漠然としてさえいても…だ。「好きなようにやってみてよ」と言われると不安になり、「何か少し位言ってくれても…」と甘えが出る。やれやれ、何とも勝手な話だ。院長先生とがんサロンの話をしている時のことである。自分ではいまだ、第1期の範囲と捉え、もう少しじっくり、ゆっくりとしたい気もある。

「フン、フン…」一方で、具体的にもう少し積極的な動きも必要なのかも…「まあ、そうかもね…」どっちがいいんだっ？(笑) 結局、亀の歩みで行くことにした。さて、どうなることやら…

病院で

患者さんの話を聴く日々。患者さんは主治医とのやり取りの中で、ストレスや不安を抱える。わからないことがあってもつい、そのまま診察が終わってしまう。言いたいけど言えない、でもすっきりしない…「言っているんですよ、遠慮せずに意見があったら言ってください」と伝えるも「でもね～先生も良かれと思ってそう言ってくれてるんだろうし、最終的には先生の言ったことに従うつもりだし…」とか「でもね～やっぱり矛盾があるよね～」など…一緒に「ふ～う」とため息をつく。こうしたやり取りはいくらでもある。

矛盾とか葛藤って…

このふたつにあまり尖がっていると未来が見えなくなる。矛盾を一つ一つ数えていたらきりが無い。私など、自己矛盾も含めれば、一日や二日で終わるものではない。確かに矛盾を突き破り、相手に自分の気持ちをきっぱりと伝え、すっきりすることも大切だ。「勇気を持って、とことん追求しよう！」と試してみたり「もう少し、冷静になってみよう」と思う時もある。

「ゆっくり考えるのもいい」と思う時があれば「この気持ちをそのままにして次にはいけない」と再び矛盾や葛藤と格闘したりもする。私はどちらとも言わずに、一緒に座っている。さて、どうするかはご本人の捉え方なのだ。しかし、冒頭に書いたようにこれらにあまり強くこだわっていると未来の時間を無駄使いすることもある…ような気もするのだが、いかがなものか？

話すことは放すこと

治療開始予定の日が近くなり、「少し気持ちがざわざわする」と言っただけで患者さんがやってきた。テレビもつまらない、本も読みたくないとのこと。思いつくままにお話ししてもらいながら時間が過ぎてゆく。ゆっくりと患者さんが言った。「やっぱり、人と話すのが一番だな…こういう時は誰かと話すのが一番気持ちがまぎれる」そのあとも、がんサロンの小さな部屋でゆっくりと時間が流れた。

話すことは自分の辛い思いから、瞬間、解き放たれることなのだと思う。自分の執着からも離れられることもある。話すは離す、そして放す。私はそのお手伝いをさせて頂く。

人を診て、そして看るとのこと

一番長く見つめているのはパソコンの画面だ。患者さんのベッドの足元でパソコンを使っている。患者さんの枕元は反対方向である。

告知の時にはデータを見ながらずっと一気に説明が始まる。その節々で、患者さんがどんな表情で聞いているかも確認せずに話が続く。やっと話が終わった。いきなり「何か質問は？」患者さんは分からないところが分からない。覚えている言葉がない。



病気だけでなく

その人の全体を捉えること。その人と「人」として向き合い、理解しようとする。ホスピスケアを学び始めた初期に教えられた古き良き言葉である。私は今もこの言葉を時々思い出す。医療従事者が患者さんを一人の固有な存在として尊重するという事。病気であっても、その人なりの考え、感情、価値観、希望がある存在だということ、この当たり前前の事実をどれだけ、頭に叩き込んでケアを展開しているか…いつも、繰り返して聞いているか？自分がして欲しいことを他者に提供しているか？自分がして欲しくないことを患者さんにはしてはいけないか？自問自答の日々である。私の仕事は患者さんの現実につき合う事だと思っている。極めて地味な、日常のプロセスの中の営みだと思う。ひとりひとりの異なる現実につき合う事はしかし、限りなく多くの事を私に伝えてくれる時間でもある。

人と出会い、言葉を聴き、思いを拾う。その人の物語が始まる。一つとして同じものがない固有の物語は、毎日、途切れることがない。

丁寧に聴ける自分でありたいと思う

夢みたものは…

長野県東御市 荻原 雅信



「荻原さんですか。救急救命です。奥様が意識不明、心肺停止です」その知らせは唐突に私の仕事場にかかってきた。家内が英会話の勉強会に参加している際、「頭が…」という一言を口にして急に倒れこんだのだという。私は状況を何も理解できないまま、家内が搬送されている病院に車を走らせた。救命の方の「くれぐれも気をつけて病院に向かってください」という言葉が、何度も頭の中を行ったり来たりしていたのを覚えている。

医師の診断は、重症のくも膜下出血であった。病室のベッドに横たわる家内は、辛うじて心肺を動かしてはいるものの、意識はなく、何度声をかけても返事は返ってこなかった。

翌日の午後5時13分、家内は逝ってしまった。
2013年12月12日。54歳であった。

家内と出会ったのは、1979年京都の大学に入学し、天文同好会に入部した時であった。お互い1浪し、同じ年の1回生であった。

大学卒業後、二人とも長野に戻り就職をし、縁あって2年後に結婚することになった。娘を二人授かり、家内は立派に育て上げてくれた。下の娘の就職先も決まり、少しはのんびりできるかなと思っていた時の、急逝であった。

その日の朝、いつもと変わらない「行ってきます」「行ってらっしゃい」という挨拶があり私は家を出た。今思えば、それが34年間付き合ってきた家内との最後の会話であった。

女性の平均寿命の方が長い今、私が逝った時には…という話はたまにしたが、家内が先に逝った時の話をしたことは皆無である。「菊の花を供えるのは勘弁して」「私は死んでも千の風にはならない」くらいしか記憶にない。家内は黄色のフリースが好きだった。

葬儀の仕方、遺骨の扱い等、どのようにしたら家内が喜ぶか悩んだ。悩みはしたが、結局私が納得するやり方で、すべて行なってきた。生前から、私が何かをする際いつも最後は許してくれた。私がやりたいようにやらせてくれた。そういう女性であった。だから、天国でも不満げな顔をしてはいるかもしれないが許してくれていると思う。家内を失ったことは、表現の仕様がなほほどのダメージであった。ある日強い風がビューッと体にあたり、気が付いたら体半分がなくなっていた。目には見えないが、真っ赤な鮮血が常に流れ出ている、そんな心境であった。私にとって、朝仕事に行き、夜、家内のいる家に帰る。この繰り返しが生き甲斐であった。彼女と一緒にいることが唯一の心の安らぎが得られる時間であった。

生き甲斐を失くしてしまった人間は、こうも脆いものかと思ひ知らされた。あまりの淋しさに家内の遺影を抱きしめ慟哭した時もあった。食欲がない、眠れないといった体の不調がずっと続いた。朝、床から起き上がることが、その日の最大の苦行であった。しかし、幸い仕事には行くことができた。仕事を失ってはいけないという一心で働いていた。本能に近いものがあつたと思う。

2年半が過ぎようとしていた頃、少しずつ体調が元に戻り始め、気力が持てるようになってきた。私は地元の合唱団に入った。経験があつたわけではない。大きな声を出すのが好きだつたことと、見学をさせてもらった際、自分の周りで響きあう歌声が本当に心地よかつたからだと思う。

血を流し続けていた傷口が少しずつ小さくなっていく、そんな気がした。

最近歌つた合唱曲に、立原道造作詞の「夢みたものは」という曲がある。周知の通り詩人の立原は24歳の時、結核で夭逝している。亡くなる2年前、同じ職場の女性・水戸部アサイに求婚した頃の幸せな時間をしたためたのがこの一篇の詩である。

「夢みたものは ひとつの幸福 ねがつたものは ひとつの愛」

その詩はこの一節から始まる。私も、家内と共に暮らすこと、そして同じ人生を歩むこと、たつたそれだけのささやかな幸福を求めていただけであつた。

毎朝、仕事に行く前、家内の遺影に「行ってきます」と挨拶をする。「行ってらっしゃい」という返事はないが、それが二人のいつものルーティーンであつたから今でも続けている。変わったことといえば、挨拶の後、私が遺影の中の家内の鼻・唇・頬に触れるようになったことである。

私の指先には写真立てのガラスの冷たさではなく、生前の家内の体温が鮮明に感じられる。指先が覚えているのである。

家内と二人で夢みたものは、今もいささかも色褪せてはいない。(完)



混声合唱曲集「夢みたものは」より

夢みたものは…

作詩 立原 道造 作曲 木下 牧子

夢見たものは ひとつの幸福
ねがつたものは ひとつの愛
山並みのあちらにも しずかな静かな村がある
明るい日曜日の 青い空がある

日傘をさした 田舎の娘らが
着かざって 唄をうたっている
大きなまわり輪をかいて
田舎の娘が 踊りをおどってる

告げて うたっているのは
青い翼の一羽の小鳥
低い枝で うたっている

夢見たものは ひとつの愛
ねがつたものは ひとつの幸福
それらはすべてここに ある と

立原道造は、1914年(大正3年)7月30日ー1939年(昭和14年)3月29日)、昭和初期に活動し24歳で急逝した詩人。東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、建築家としても足跡を残している。

「夢みたものは」は、彼の詩を元にした合唱曲(作曲:木下牧子)。

結核を患い、24歳の若さで夭逝したが、亡くなる数年前から勤務先の女性・水戸部アサイと清い交際を続けていた。

1937年6月5日の日曜日、道造はアサイを誘って軽井沢へ日帰りの小旅行へ出かけた。信濃追分駅近くの草むらで、道造はアサイにプロポーズをしたという。

1938年、立原道造はアサイと過ごす幸せな時間を一篇の詩にしたためた。愛する喜びに世界は光り輝き、目に映るすべてが幸せに満ち溢れていた。

「夢みたものは」は、『優しき歌 II』の中の10番目の詩として書かれた。

立原道造は、その年の12月に咯血(かっけつ)し容体が悪化。この時すでに手遅れの状態にあつた。アサイの献身的な看病も実らず、3か月後の1939年3月29日、24歳の若さでこの世を去つた。道造とアサイは最後まで清い間柄だつたという。

四季の風韻



第9回

圓龍寺住職 眞木興空

「魂の紅葉」

自らのいのちを「美しく紅葉させる術（すべ）」について記します。

春日大社の宮司（ぐうじ＝神社の代表神職）をおつとめになられた葉室頼昭（はむろよりあき）さんは、「樹木が紅葉する仕組み」について、ご著書の中で次のように語られています。

《樹々は春から夏へと、ずっと葉の中に葉緑素というものを含み、炭酸ガスを酸素に換えながら生き続けますが、秋になると、来年の春に芽を出す準備のために、葉緑素が葉っぱから幹のほうに移っていきます。そのために、その木の葉の本来の色が表れてきたのが、紅葉です…》

（葉室頼昭著『神道とくつくしび』春秋社刊）

葉室宮司さまは、大阪大学の医学部を卒業された医師でもあるのですが、このお話を読んで私は、紅葉の美について、それが「染色ではなく、葉緑素が葉から幹へ移る、脱色の成果である」という、新しい視点をいただきました。

すなわち、宮司さまの御説に学ぶと、「葉の一生」は、

- ② 幹から養分を貰って、芽吹き、葉を繁らせる。
- ② 青々とした葉として生育した後は、外界から様々なものを吸収し、己を通して質の転換を行い、外界に役立つものとして吐きだす。
- ③ やがて、時期を知り、保持している要素・養分を、幹へ返していくことで、自らを美しく染める。
- ④ 葉から幹へ戻された養分は、来年の新しい緑を作り出す。
- ⑤ そして紅葉した葉は、いつか落葉し、土に帰り、根を養う。というサイクルの中で輪廻しています。

したがって、こうした「葉の一生」を自らの人生に重ねるなら、我々のいのちもまた、自らを美しく染めることができるのではないか…。

そんなことを考えるわけです。

大切なポイントは二点。

一つめは、

「周囲から取り込んだものを、自らの中で質を転換させ、周囲に有益なものとして排出する」という生き方です。

葉は、取り込んだ炭酸ガスを酸素に変えて周囲に供給し、環境を浄化させています。

同様に我々も、周囲から受ける諸々を、自らを通過させることによって浄化し、「善き言葉・優しき思い・親切な行為」等、周囲に有益なものとして排出できるか否か…という点。

二つめは、

「時期を知り、己の中にあるものを、意識的に、お返しをしていく」

という姿勢です。

先ほど、「紅葉は脱色の美である」という説をご紹介しました。

青葉の頃を過ぎたなら、次第に余分な持ち物を手放しながら、頂戴したご恩をお返しし、自らの中に蓄積された知恵を、次の世代へ渡し継いでゆこうと努める中で、我々のいのち・魂は、本来の色をそこに現し、錦秋の美を示すことができるのではないのでしょうか。

「人生の秋」に突入している自身の年齢を考える時、

（ああ、これからは、日々〈お返し〉に努めながら、生きねばならぬなあ…）

という気持ちが、フツフツと湧いてまいります。

自らの「魂の紅葉」を考えること、それはすなわち、安らかな帰寂の準備、とも言えましようが、いつか落葉を迎えるその日までは、自分色の紅葉をしっかり保ちたいと願うのです。



びあサポぐんまの活動から 本田麻由美講演会における「光る」言葉より

「たまごホールは？」駐車券を出しながら聞く。上がると世話役の方があわただしい。教室くらいに思っていた会場は広かった。本田先生の話は、事細かで見やすい。職業柄観察眼は鋭い。座談会で舞台上になると土屋代表が場を進める。スタートは音響で躓いたが、病んでいる人の話は内容がしっかりしている。私の番、亡き妻から教えてもらった事を話す。「今、毎日味噌汁を作る幸せを感じています」。体験談を話し終わったら会場から拍手をいただきびっくりする。残りの人生幸せを感じながら生きたい願望を話したつもりが言葉不足と思った。ピアサポーターになり、貴重な経験ができた事に感謝している。

K・I

本田麻由美さんの言動一致、かつ謙遜なお人柄は参加者の心を打ちました。時間があれば、さらにお聞きしたいことが、マイナンバーの課題です。そして、希少がんで高価な抗がん剤を混合治療すると生じる様々な矛盾等々。緊迫した話題に差し掛かったところで時間になり残念でした。「社会保障削減の功と罪」に絞ったお話しが聞きたかった。本田さんがお持ちのテーマも毎年「更新」されているはず。ぜひ毎年の開催をお願いしたい。座談会では、座長の話の振り分けが自然で、パネラーはリラックスできた。参加した友人が「耳下腺がんの方の経験に比べれば、私の闘病なんて」とつぶやくのを聞いて、今日のための皆の努力は報われたと喜びがこみ上げてきた。とても貴重な機会を与えていただきました。びあサポぐんまの案内で学習の機会を増やし「患者さんの現在を知りたい」という思いを一層強くしました。 A・S

本田先生のお話とても参考になりました。新聞記者という客観的な視点とご自身が癌に罹患された経験を併せていつもの体験談とは、またひと味違う深い洞察と問題提起があったと思う。たまごホールという大ホールで初めて開催でスタッフもいつになく緊張気味でしたが、展示されていたウィッグやそしゃく障がいや味覚障がい等の方のための食事などの説明文や展示物なども、賑やかさに華を添えました。先生を囲んでの座談会、各々3分以内の話題、中でも遺族の方のお話で先生ご自身が涙ぐまれる場面があり印象的でした。残念なことは、癌患者の講演会は、都心に比べると肯定的なイメージが希薄な感じがします。そして、願わくば、若いピアサポーター次世代の育成や支援がほしい。より強く感じる講演会でした。 Y・H

このページは、びあサポぐんま会報「かわら版」16号の記事を引用させていただきました。



この4年間に5回の癌告知を受けました。H24に前立腺がん、H25に大腸がん、人生初めての手術に頭は真っ白。4ヶ月後、左肺に転移、副作用の手足のしびれやめまい、ふらつきに悩まされながらの治療。H27に右肺に再発、治療の甲斐あってH28.4月に消失し治療中止。その4ヶ月後再発身体の中の主治医は病院の先生。身体の外的主治医は自分、二人の主治医が相談して決めれば「鬼に金奉」です。癌患者でも24時間癌患者ではありません。病院を出れば健常者として生活しています。辛いときは泣き・楽しいときは笑い自然体で生活しています。笑いはリスクのない薬。 I

本田さんは、「生きるために治療する。治療のために生きているのではない。治療というのは、生き方の選択をしているんだ」とおっしゃっていました。真剣に生きておられる患者さんがいます。でも、医療現場では生活の事まで対応できていないのが、悩ましいところです。私が勉強を始めたころと比べ、治療法はどんどん高度、複雑化しています。その知識についていなくても、本当に大変になってきました。もう医師が孤軍奮闘しているだけでは、立ち行かなくなりました。そこで、「チーム医療」が登場するのですが、まだまだ医療側の都合が優先されていて、患者さんは声を出しにくい状況だと思います。チームの一員として責任のある発言ができる、個人の経験を消化して誰もが参考にできる知恵を語れるような、成熟した患者さんの会が群馬でも開かれるようになったことを嬉しく思います。当院の看護師も感動していました。一緒に頑張りましょう。 H・S

座談会、一緒に参加された方からは、自身の治療のこと。担当医との意思疎通に努力していること。病気になってからの過ごし方。患者の家族としての気持ち等、お聞きすることができました。私は、治療後の復職時のことを話す機会をいただき、自分の体験を語り、今の日本の働くがん患者の現状を訪ねたところ、全国規模の詳しいデータは残念ながらなく、静岡県のデータを示していただきました。がんと告知され依願退職者が多いこと。また、配置転換された人や、正社員からパートになった人もいるとのこと。残念ながら治療後の社会復帰についての政策提示はないようです。ただ、「一億総活躍社会」の中に問題提起していくことはできるのではないかと。との明るい話を伺えました。会場からは、「若いお父さんが発病し、この後どうしたらいいのか。途方に暮れている。」という話も出ました。日本人の二人に一人が、がんになると云われています。医療も進歩し、5年生存率も上がっています。辛い治療後の社会復帰がづらいものにならないための、小さな問題提起になればと思います。 E・K

イベント・シンポジウムのご案内

死別体験者の集い・分かち合いの会

日時：毎週第2日曜日

14：00～16：00

場所：群馬県社会福祉総合センター

(JR新前橋駅東口から徒歩約5分)

■ 誰でも予約なしに参加できます。無料

会の案内

死別の悲嘆は人生最大のピンチと言われます。この会には、死別による悲嘆を抱えた人たちの集まり、互いの経験をお話したり、聴きあいをする事で、壊れた心の再生を目指します。

1996年より開始され、これまでに延べ2,000名ほどの方が見えました。

月	開催日		
11月	11月13日	12月	12月11日
1月	1月8日	2月	2月12日
3月	3月12日	4月	4月9日

第24回

日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会 in 福岡・久留米◇

日時 2017年2月4日(土)・5日(日)
午前9時～

本研究会は、“がんや在宅ケアなど今日的な医療や福祉の問題について専門家と市民が同じ高さの目線で考え・・・痛みや不快な症状の除かれたやすらかな「ホスピスケア」や十分にサポートされた豊かな「在宅ケア」”(設立趣意書より)を願うものです。

問い合わせアドレス

http://www.nksnet.co.jp/jshh24_kurume/

寄付ありがとう(敬称略) 2016.9まで

工藤八郎さま 桑原芳美さま 鈴木庄亮さま
丸山幸枝さま 依田一枝さま 千明優子さま

郵便振替

番号：00560-4-5287

名称：群馬ホスピスケア研究会

主催 びあサポぐんま の公開講座

日時 11月19日(土) 13：30～

会場 太田市福祉会館2階 大会議室

講師 野村 和弘 先生

太田に生まれ、東大医学部卒。米国立大学留学。国立がんセンター中央病院医長、部長、副院長を経て院長に。現在名誉院長。2006年独立行政法人 労働者健康安全機構 東京労災病院院長から名誉院長に。また特任ディレクターを務める。現太田市古戸町の野村クリニック医院院長。

演題 **がん医療の温故創新**

日時 12月24日(土) 13：30～

会場 高崎市社会福祉総合センター

講師 樋野 興夫 先生 (定員 70名・要予約)

第1部 講演 演題

「がん哲学外来～あなたは そこにいるだけで 価値のある存在～」

第2部 クリスマス
交流会

問合せ・予約

090-6937-1857(土屋)



地域がんサロンぐんま 高崎・前橋

開催日： 毎月第3日曜日

時間：13：00～15：00

場所：高崎会場 高崎市総合福祉センター3階

高崎市末広町115-1 ☎027-370-8822

前橋会場 ケアホーム「愛の家」

前橋市朝日町4-5-5 ☎027-225-2311

地域がんサロンぐんま 太田

開催日 毎月第1日曜日

時間：13：00～15：00

場所 太田市福祉会館

太田市飯塚町1549 ☎0276-46-6208 (日曜は連絡不能です)

地域がんサロンぐんま 富岡

開催日 毎月第2日曜日

時間：13：00～15：00

場所 富岡市上黒岩1879-1 (ふれあいの居場所“よりみち”和田宅)

☎0274-63-7427 (土、日 午後7時まで)

地域がんサロンぐんま 新町

開催日 毎月第2火曜日

時間：13：00～15：00

場所 高崎市新町2147-18 空間 みちくさ(旧 いしくら 跡)